



写真: 上より、真剣な眼差し、会見の様子

面会は、K.K.先生のご指示により、予め7名の者が原則各1問の質問を用意し、それを先生が翻訳してルーカス先生にその場でお伝えいただくかたちで行われました。質問は、R.T.、T.O.、T.K.、K.Y.、H.Y.、F.S.、O.K.、T.O.(第2問目)、R.T.(第2問目)の順でとりあげられました(敬称略)。なお、T.M.さんは、代表してルーカス先生へのプレゼントをご用意いただき、感動的な贈呈品の由来の説明をしてくださいました。

皮切りにK.K.先生より次のような質問がありました。

○ K.K.先生:「引退後は何をなさるご計画ですか？」

◎ ルーカス先生:「随分個人的な質問ですね(笑)。5年前から時間ができましたので、好きなピアノのレッスンを始めました。また皆さんが来られたら今度は演奏会をしましょうね。」

雰囲気 が和んだところで、順次、質問者の質問とそれに対するルーカス先生の応答を、K.K.先生が通訳して伝えてくださいました。

○ R.T.さんの質問: 子ども(12-15歳)のカウンセリングの時に感じるのですが、セラピーをしていると問題行動の消失や、言動の変化はあるのですが、子どもゆえその意味を言語化できないか、しないときがよくあります。子どもの言動の変化を内面の価値の変化として捉えるべきでしょうか。

◎ ルーカス先生の応答の要点: ログセラピーは、精神的次元に働きかけるわけですが、この年齢の子どもは、まさに思春期で、精神的次元の働きが始まる時期です。ですから、この時期の子どもには、他のセラピーとの組み合わせ、例えば行動療法と組み合わせてその補助としてログセラピーを使うということが考えられます。その場合、子ども自身が意味を探究できるように導くことが課題になりますが、私の経験では、逆説志向は効果があるし、過剰自己観察の消去(反省除去)によって、何か他のことにまなざしを向けさせることが有効のように思われます。態度転換は、一般的には難しいですが、精神的成熟度の高い子どもには場合によっては用いることができるかもしれません。例えば、私が経験した事例では、子どもが暴力を受けた場合、その後の処置として、その経験自体を意味あることに変換することを試みるよりは、その子がバレーが得意なら、そのことに眼を振り向けさせ、暴力を受けた経験を反省的に振り返ることを打ち切らせる方が効果があると思います。成人の場合には「黒い石」の中にも「白い石」があることを見つけさせようと思いますが、子どもの場合は、そのような反省を打ち切るよう働きかける方がよいと思われま

○ T.O.の質問: セラピストの方が、「人生(世界)はどんな場合も意味に充ちている」ことを信じることはできません。意味を見失ったクライアントが、意味の発見を通じて人間的成長を遂げることは難しいように思います。たとえば、子どもを教育する場合も、理想的には親や教師自身がそのような「意味への信仰」を持っていることが望ましいとは思いますが、現代というニヒリズムの時代には、それはむしろ稀なケースかもしれません。まず、親や教師たちにログセラピー・実存分析による働きかけを通じて、「人生(世界)から問われて生きる」という態度に目覚めてもらう必要があるように思います。クライアントとして相談を望んでいない親や教師たちにも、ログセラピストは働きかけていくことができると先生はお考えでしょうか。またどのような働きかけ方をすべきだとお考えでしょうか。

◎ ルーカス先生の応答の要点: 重要な問いかけだと思います。教師やセラピストといった職業を担う場合、その仕事に対する使命のようなものが必要になります。単に、自分が「意味に対する信仰」を持っているだけではなく、その人自身が「意味を活かすことのできる人格性(die sinn-vitale Persönlichkeit)」つまり、意味が外に輝いて出るような人間でないと難しいと思います。自分自身が、意味に向かって生きているだけではなく、すべての人間に対する信頼、どんな人間でも切り捨てないという態度が大切です。その意味で、どんな人間でも教師やセラピストに向いているというわけではありません。フランクフルは、「私たちが何を話すかよりも、私たちがどんな風に在るか、存在の仕方が重要だ」という意味のことを述べていますが、私も、何をどのように教育するか、セラピーするかよりも、その人がどのくらいの輝きをもって存在しているかが重要な意味をもってと思います。その意味で、ニヒリズムの考え方を持っている人は、教師やセラピストといった人を援助する職業に就かない方がいいのです。

○ T.O.の補足質問(一通り質問が出た後、追加質問が募られた際に以下のような関連質問を出したのでここに付記します): セラピーの場合は、相談を希望しているクライアントに働きかける状況が一般的ですが、教育を問題にする場合は、相談を望んでいない親や教師に働きかけることも射程に入れざるを得ないように思われます。ドイツのログセラピーの活動においては、教育を問題にする場合、相談に来る親や教師だけではなく、こちらから、積極的に機会を作って教員養成や子育てをする親の教育に関する活動をされているのでしょうか。

◎ ルーカス先生の応答の要点: 私は、基本的にセラピーと教育の境界は、ログセラピーを行う限りにおいてはそれほど明確ではなく、むしろ両者の間に流れのようなものがあると理解しています。親に対して向き合い、動かしたいと思う場合、それをするのが何のために重要かという価値が大切になります。言い換えれば、動機を与えるには価値を通して与えるしかない、ということです。子どもがいることで親は自分の時間を犠牲にし、子どももまた親のために犠牲になっている、ということをネガティブなこととして受け取るのではなく、そこにむしろ大きな価値を見出せれば、それが深い動機付けになっていくのではないかと思います。もちろん、ログセラピストが、そのことに気づかせるために親たちに積極的に講演活動を行うといったことも可能でしょう。ただ、10年以上、ミュンヘンの児童教育相談所の所長をしていた経験から言いますと、親が相談に来たときに批判から始めるとうまくいかないことがありました。初めから、親がどんな誤ったことをしているかはあまり問題にせず、どんな親でも、基本的には子どもを愛しているということを確認することから始めて、その信頼を基盤にすれば、そこから何かが芽生えてくるでしょう。その上で、何が為すべきベストかを考えていくことが大切です。ある事例を思い出しました。毎日、毎日、時間がある限り子どもを勉強させていた、ある教育熱心な母親がやってきました。子どもは勉強がいやでしょうがないらしく、自分から熱心にやらないという状況を、その母親は嘆いていました。そこで、私はその母親に次のように問いかけました。「もし、この子が40歳になったときに、人生で一番楽しい時期はいつだったかと尋ねたら、何と言うでしょうね。」すると母親は、「私が家から出て行ったときだというでしょう」といって泣き出してしまいました。それを土台にして、その子が「あの時、わたしはいい子ども時代を過ごした」と40歳になったときに言うようになるためには、いま何をすればいいかを共に考えていくことを始められるのです。(K.K.先生:「まさに、ソクラテス的な対話ですね。」)

(続く)(T.O.記)

○ O.K.先生の質問:Dr.フランクルの「超意味」と、古代中国の思想家・老子の「道」は類似の考えのように思いますが、Dr.フランクルは、東洋の思想に関心をお持ちだったのでしょうか。

◎ ルーカス先生の応答の要点:私自身は、タオの思想について詳しく言及することはできませんが、かつてカナダでロゴセラピーを研究しているインド人の学者が、ヒンドゥー教の信者で、その人が言うには、ヒンドゥー教とフランクルの考え方が大変よく似ているということでした。ですから、国分先生も、是非、フランクルの思想と老子の思想を比較考察した論文をお書き下さい。因みに、フランクル先生が私に話されたエピソードがあります。アジアの方に旅行をされ、講演をされると、アジアの人たちからは、「先生のお考えはとても素晴らしいけれど、私たちの歴史には、古代の賢人たちが遺してくれた同じような叢智があるのだ」といった感想を述べられることが多かったのですが、その一方で、アメリカで講演をすると、「これはとても新しい考えだ。今まで聞いたことがない素晴らしい思想だ。」という感激されることが多かったといえます。この両者の落差を、フランクルはとても興味深く思ったようです。アジアには、素晴らしい先人たちが沢山存在し、人間の生き方について考える根っこがあるということですね。国分先生が論文をお書きになったら、翻訳して発表されるように期待いたします。

○ R.T.さんの質問2:ロゴセラピーをなさる場合に、カウンセラーの姿勢として、教育的に意味や価値を積極的に指示的に示されるのか、それとも、カウンセリング的に相手がじっくりそれに気づくまで待たれようとするのか(非指示的)。ケース・バイ・ケースでしょうが、どちらが、先生の場合多いのかお教え下さい。

◎ ルーカス先生の応答の要点:教育的な働きかけと意味を軸としたセラピーを分けることはできません。意味を考えさせるセラピーが教育なのです。そして、喩えて言うなら、ロゴセラピーは、臓器移植のようであってはならないと思います。つまり、臓器が駄目になって、新しい臓器(意味)を植えつけようと思っても、多くの場合、拒絶反応が出ます。臓器の植えつけ方が強ければ強いほど、その拒否反応も強くなります。それを防ぐためには、やはり本人がそのように考えられるようにもっていくということが大切です。自分で納得できるように気づかせてあげることが重要です。先ほどの児童教育相談所の事例が、ソクラテスの対話のよい例だと思います。お母さんに、「あなたのやっていることはとてもひどいことで、そんなことやってもどうにもなりませんよ」というと「私だって子どものために思っているのです」と防衛に出るが、そうではなく、「40歳になったときどう思うでしょうね」と問いかけることでうまく展開しました。相手がもともと気づく可能性をあらかじめもっていると信じて、こちらがどういう質問をするか、どういう問いかけをするかが重要なのです。しかし、それでもどうしても駄目な場合は、最終的な手段として、これを試してみしようという風にこちらから価値を提示することもあります。それはあくまで最終的な手段なのです。

○ T.K.さんの関連質問:フランクルのように、なかなか、相手に気づきを与えるような巧みな質問の出し方ができないのですが、何かそれができるようになるためのコツをお教えいただけませんか。

◎ ルーカス先生の応答の要点:それは練習を重ねることでしょうね(笑い)。注意して使う必要がありますが、逆説志向を使うことも有効ですね。一例を挙げますと、ある母親が来て、子どもが2人いるが、うるさくてしょうがない、一人が何かをしてもう一人はまた別のことをしたいと言い出す、もうとてもたまらない、ストレスだ、と訴えました。それを聞いて私は、「二人とも重い病気で一日中ベッドで寝ていたら、さぞかし幸せでしょうね」と語りかけました。そのときも、「健康の方がいいですよ、喜んだ方がいいですよ」と直接的に言うのではなく、逆説的(パラドキシカル)に言ってみて、向こうが自分で気づくことを引き出すことが大切でしょう。

○ T.O.の質問2:ルーカス先生は、直接フランクル博士よりご指導を受けられたロゴセラピストの第二世代でいらっしゃると思いますが、今後、世界中の新しい世代にロゴセラピーが継承されていくことに期待を寄せておられることと存じます。しかしあえて、心配されていることがお有りかどうか、お伺いしておきたいと思います。といいますのも、どんな立派な思想も、その学派が形成され、幾世代も継承されることによって変質し、ある場合にはエピソード(まがいもの)さえも生み出すことを歴史は物語っているからです。その意味で、私たちの責任も重大だと感じています。私自身は、ロゴセラピー・実存分析の発展を考える場合も、常にフランクルのオリジナルテキストに立ち返り、吟味されることがとても重要だと考えますが、先生のお考えをお聞かせ下さい。

◎ ルーカス先生の応答の要点:この点に関しては、先日の「日本ロゴセラピスト協会」の創設に際しての挨拶で述べておりますので、再度繰り返すこととなりますが、「花を咲かせる木」の喩えで述べたいと思います。それが、どんどん伸びていくことも大切ですが、より大切なのは、「根」を大切にすることです。違う根っこをもってきて接いだり、ある部分を取り除いたりするのは、よくないことです。根っこが侵されるともう健全な発展は望め

ないのです。それが繁栄するかどうかの境目になると思います。世界中にいろいろなロゴセラピストがおり、多くの協会が設立されてもいます。それらが発展していくためには、「根」を大切にすることでしょう。私は、ロゴセラピーは、護られているものだ強く信じることができます。なぜなら、フランクルがあのような4つの強制収容所の中を4年間生き抜き、後世にロゴセラピーを伝えることができたのは、何かそこに、ロゴセラピーが発展して伸びていくべきものだという意味があるのではないかと思えてしょうがないのです。ロゴセラピーは護られていると強く感じるのです。それは人間の尊厳を大切にすることであり、その意味で非常に大切なセラピーであると思います。

○ H.Y.先生の質問について:H.Y.先生の質問は、ルーカス先生がかつて考案されたロゴテストについて尋ねられたものでしたが、詳細な質問内容であったため、質問を独訳してルーカス先生にお渡し、後日お答えいただくことになりました。当日は取りあげられませんでした。質問の概略だけ紹介しておきます。実際は、もっと具体的に細かく質問されています。

〈大きな質問1〉ロゴテストの得点の出し方について。ロゴテストは、概念的に、得点が高い方が精神次元の健康度が高い(空虚感や絶望感が低い)と考えるのでしょうか。それとも得点が高い方が、精神次元の健康度は高い(空虚感や絶望感が低い)と考えるのでしょうか？

〈大きな質問2〉ロゴテストの第Ⅲ部の3、の採点の仕方について

「あなた自身のケースについて簡単に描写してください。その際、あなたが今まで達成したいと考えて努力してこられたこと、あなたが実際に達成されたこと、そして今の状況に対してあなたがどのように考えてられるかを対置してください。」—この自由記述から採点するわけですが、採点の基準として何か具体的なものがあるのでしょうか？ それとも、セラピストの経験から、直感的に点数化するのでしょうか？

◎ ルーカス先生の上記の質問に対する応答は後日ということですが、ロゴテストについて若干のコメントがありました。それは、ロゴテストは、1970年代にルーカス先生が考案したもので、今の時代には合わない要素も多々あり、また、中部ヨーロッパで使用されたものが、日本にそのまま適用できとも思えませんので、質問項目の内容から慎重に検討し直す必要があるのではないのでしょうか、というような内容でした。

(T.O.記)

【質問1(質問者:T.K.)】

何をもって「このセラピー(心理療法)はロゴセラピーである」と言えるか？

逆説志向や自己観察消去・態度変換などの技法を用いていればロゴセラピーであり用いなければロゴセラピーではない、というわけでは無い。人生の意味をセラピーの主題として扱っていればロゴセラピーなのか？クライエントの責任性の喚起を目的としていればロゴセラピーなのか？心理療法が数あるなかで現在の日本ではあまり知られていないロゴセラピーについて説明しその有効性を主張していくためには、ロゴセラピーはそれ以外の心理療法と何が違うのか、という境界や定義を明確にしておく必要がある。

【ルーカス先生の回答】

方法は重要ではない。ロゴセラピーが他のセラピーと決定的に違うのは世界観・人間観・動機論(どのような動機に基づいて人は行動するか)である。一般的な心理療法では心身態だけを扱うが、ロゴセラピーでは精神次元を扱う。ロゴセラピーの世界観では、全てがバラバラに存在しているのではなく、世界は秩序だったものであり究極の意味がその根底に存在している。罪・死・苦悩という3つのトリアスでさえも意味を持っており、その3つを支えるものとして究極の意味がある。そのため、ロゴセラピーでは事故や災害といった(人間の力では変えることのできない)悲劇的な状況の中で苦しんでいる人でさえも助けることができる。この点に関しては他のセラピーでは限界がある。

(T.K.: 自分のセラピーでは、クライエントと人生の意味を直接話題にしたことはない。もちろんセラピストはその事をいつも念頭においてはいるが、時々自分のしているセラピーがロゴセラピーなのかそうでないのかわからなくなる)

ロゴセラピーだからといって、人生の意味という抽象的な話題をセラピーの中で直接取り上げて話し合うわけではない。セラピーの中で取り上げるのは、常にクライエントの具体的な問題や葛藤であり、それに対する答え(人生からの問いに対していかに答えるか)である。人生のほう人間(クライエント)に対して「あなたは何をしますか？」と問いを発している。それに対して「どのように答えるべきか」「どのように答えることに意味があるか」「何が最善の選択肢か」をクライエントとともに考えていくのがロゴセラピーである。

【質問2(質問者:K.Y.)】

境界性人格障害に対するロゴセラピーについて。境界性人格障害では時に防衛機制がうまく働かなくなり、現実検討能力が著しく低下することがある。(K.Y.の)以前の職場では、境界性人格障害に対しては、心理的な負荷を減らして現実検討能力が回復したらセラピーを終結するという方針をとっていた。

(例)育児が原因で混乱しているクライエント

→子どもを日中どこかに預けるという対処法。それによってクライエントが一旦落ち着いたらそこでセラピーを終結する。

しかし、このような障害を持つ人の中にも実存神経症の人がかなり含まれているのではないかと目先の問題の解決だけではなく、そういった葛藤状況の中でも自らの判断で意味ある選択をし、行動する自信を取り戻すことが、真の回復ではないか？また、同僚のスタッフに対して、このような考えをどうやって説明すれば良いか？

【ルーカス先生の回答】

子どもを預けるという対処法が全ての人にとって一番良いのであれば、それはそれで構わない。精神障害がある人でも心身次元から出て精神的な「自由の場」(それは障害のない人よりも狭くなっているが)を見ることが出来る。攻撃性のある人でも、精神次元の働きによってそこから距離をとることができる。フランクは、問題の箇所は薬で抑え、一方で精神次元の自由の場を広げていくという、二つの方法を並行して行っていくことが大切だと考えた。

(K.Y.: その考えを同僚のスタッフに理解してもらうにはどう説明すれば良いか？)

セラピストの役割は同僚を説得することではなくクライエントを治すことである。同僚との葛藤よりもクライエントに対してエネルギーを注ぐほうが良い。クライエントの治療で成果を上げるという形で同僚を説得するしかない。

フランクの治療の例。攻撃性の高い統合失調症の患者。一日中ぶつぶつ言いながら紙を細かくちぎってい

る。ある日そのクライアントが「神の栄光を讃えるために歌いたい」と言った。フランクは、これは精神次元からの声があふと出てきたものであると考え、教会の聖歌隊に参加させようとした。同僚は大反対したが、フランクは二人の介護者をつけてこのクライアントを週に一回の聖歌隊に参加させた。クライアントはすごく喜んで歌を歌い、攻撃性もまったく無くなった。

【質問3(質問者:F.S.)】

日本人のPILテストの結果は、中学生から90歳ぐらいの高齢者まで、ほぼ年齢に比例して意味・目的意識が高くなるという傾向にある。しかし、20歳代後半から30歳代前半にかけてはあまり得点が上がらない。全般的意味喪失感に加えて主体性のなさが顕著に感じられる。(例:「(職場で)言われると嫌と言えずやっているが・・・」「毎日が流されている感じ・・・」)。高校生や大学生の時代にロゴセラピー的な態度の涵養をはかる教育が必要ではないか？また、ヨーロッパの現状はどうか？

【ルーカス先生の回答】

テスト結果はあくまでも統計であり、結果の解釈の仕方は一通りではない。昔は子ども・思春期・大人と、はっきりと分けることができた。今はその分け方が妥当しなくなっている。身体的な発育の面では、子ども時代が非常に短くなっている。思春期が非常に早く始まって25歳ごろまで続く。永遠の思春期のような中で、子どもが自主的に家から出て仕事をしようとし、責任を持とうとしない。こういった社会的風潮の一つの現れとしても解釈できる。

(ルーカス:この調査結果は日本のあらゆる社会的階層を網羅したものか？)
(F.S.:どちらかというと高等教育を受けた人のほうに少し偏っている)

この結果を見て(ルーカスは)高等教育を受けた人が多いのではないかという印象を持った。長い間学生でいるということは、長い間責任を持たなくて良いということ。例えば、早くから働いている層と高等教育を受けている層に分けて調査結果を分析してみるとまた違うことがわかるかもしれない。

(F.S.:統計によってそれぞれの世代についての背景が見えてくる。それによって個人をより深く理解することができる。また、PILテストを行うことによって(被調査者に)ロゴセラピー的な振り返りを刺激することができる。個人のセラピーと(PILテストという)調査とを車の両輪のように進めていければ良い)

1960年代には親の経済力が今ほどなく、学生はアルバイトと学問を両立させるのが当たり前であった。今は親が子どもの面倒を全てみることができる。学生はストレスもないがやる気もない。

今の時代は、ものすごく大きな変化の起こりつつある時代。今の20代・30代の人たちはこれまでの人類が体験したことのない生活をしている。それは、生まれたときからテレビのある生活。平均して20歳までに3万時間テレビを見ている。スリ・殺人・強盗・不倫など、世の中の醜いと呼ばれるものを全て見てきた。その人たちがこの先どうなるか、これから初めて起こることなので、それについては何も言えない。テレビを見る時間の代わりにフルートの練習をすれば今頃はみな素晴らしい演奏家になっているだろう(笑)
(※この発言は、ルーカス先生がフルートの先生でもあるところから来たユーモアです)

【全体を通しての感想】

今回、初めてルーカス先生にお会いして、「優しさ」と「揺るぎなさ」という印象が頭に浮かびました。「優しさ」という言葉はすぐに思いついたのですが、もう一つの言葉が「厳しさ」とはちょっと違うし「強さ」でもしっくりこないし・・・と考えているうちに、ピンときたのが「揺るぎなさ」という言葉です。どんな強風でもびくともしない頑丈な石のような強さではなく、強風に逆らわずにしなやかに揺れてそれでもあくまでも揺るぎなく凜とした姿勢を崩さない、そんなイメージでした。フランクの写真を見たときにもそういう印象を持ちましたが、実際のフランクにもし会うことができれば、やはり同じような「揺るぎなさ」を感じたのかもしれない。

ルーカス先生の質疑のときの表情は真剣そのものでした。休暇中に無理やり押しかけてきた日本人の集団に対して面倒そうな顔一つせず、真剣に質問を理解しようと聞いてくださり、それに対して真剣に答えてくださいました。お客さん扱いで甘いことや優しいことだけを言うのではなく、違うことははっきりと違うという「揺るぎなさ」がありました。それと同時に、ときにはユーモアを交えながら和気あいあいと楽しい雰囲気では進んでいきました。真剣に和気あいあいという矛盾しているようですが、確かにあの場ではその二つが両立していました。

私個人としては、ルーカス先生との質疑を通して「自分のやっていることはロゴセラピーです」と責任をもって言わなければならないと、ようやく覚悟ができました。「自分のセラピーがロゴセラピーかどうかわからない」と言っていたら、仮にセラピーが失敗に終わってもロゴセラピーの名に傷がつくわけではありません。しかし、「ロゴセラピーをやっています」と言ってそのセラピーが失敗に終われば、ロゴセラピーを知らない人からは「なんだ、ロゴセラピーなんて駄目じゃないか」と思われてしまいます。そうなるのが怖くて、私はいつも「自分のセラピーがロゴセラピーかどうかわからない」と言ってその責任から逃げていたように思います。しかし私のやっていることは(セラピストとしての力量はともかく)まぎれもなくフランクの世界観に基づくロゴセラピーでした。

また、今回の旅行では移動中や観光中に色々な方とお話する機会があり、そこで教えていただいたことや、聞いていただいたことなどから、多くの気づきが得られました。ロゴセラピーやフランク思想についていくら机の上で勉強していても、一人の心理臨床家としても、また一人の人間としても、まだまだ自分はヒヨッコです(と言っても、だんだんそんなに若くもなくなってきたのですが・・・)。様々な分野で豊富な経験をお持ちのみなさんとうちやって親しく接する機会をもてることは、大学で同世代の友人と関わっているだけでは得られない貴重な経験です。いつまで経っても「期待の若手」的なポジションにいるのではなく、いい加減に結果を出していきたいという焦りのようなものも少しあるのですが、一步一步地道に「瞬間の意味」を実現することを積み重ねていきたいと思います。

というわけで、今日もコツコツとドイツ語の動詞と前置詞の組み合わせを覚えていきます。それがいつの日か大きな意味へとつながることを信じて！

【ルーカス先生との面会を終えたT.O.の個人的所感】

私は、今回、ルーカス先生にお会いして、参加者の皆様と同様に、先生のお人柄の素晴らしさ、高潔さ、に感銘を受けました。フランクが、なぜこの方にロゴセラピーを託されたのかもよく理解できました。フランクの天才的な臨床哲学は、ご本人が用いるときはともかく、それを後に続く人々が、実際の現場で用いられる際には、適切な体系化と具体化が必要であったのでしょう。そこには、フランクのオリジナルな思想の単純化の危険もつねに付きまといます。しかし、フランクの思想の真髄を理解され、なおかつ、その真髄を担保しつつ、実践的叡智の具体化を成し遂げられたルーカス先生のお仕事があれば、－K.K.先生がすでに「ドイツ便り」でも述べられておられるように－ロゴセラピーの発展はなかったのでしょうか。私たちの質問に一つひとつ真摯な態度でお答えくださるルーカス先生の姿勢にふれて、また以上にまとめましたコメントの内容を振り返るにつけ、その思いを新たにしました。

私は、このあと、フランクセンターを訪れた際にも実感しましたが、ロゴセラピーは、単なるセラピーの一種であるだけでなく、人間の生き方を考えたり、それを援助するあらゆる活動の中核に位置する、実践的な人間学であり、臨床の知であるということを再認識しました。センターには、心理療法のほか、教育、経済、医療（看護・介護）、哲学などの領域においてロゴセラピーの考え方がどのように活かされるか、どのように位置付けられるのか、わかりやすくパネルに図示されていました。私は、教育学や哲学の分野において、そのつもりで学生時代よりフランクの思想と取り組んできましたが、ご当地のロゴセラピーの活動の在り方においても、そのように位置付けられていることを確認し、改めて意を強くした次第です。

その意味では、ロゴセラピーの発展は、地球的・歴史的な規模で危機に瀕する人類の安寧にとって大変重要なのですが、ルーカス先生は、それらが、本当に発展するためには、その根っこであるフランクの思想そのものが何であるかを正確に理解し続けることが何より大切であることを、改めて私の質問に答える中で述べてくださいました。誤解してはならないのですが、これは何も、フランク自身を教祖として崇め神格化し、ロゴセラピーを教条（ドグマ）化するのとは全く異なることであると思います。フランクという偉大な存在を通して顕在化した叡智を、各々が自分の状況で真摯に受け取り直すということが重要なのだということでしょう。

チェコのテレジン要塞（テレージェンシュタット強制収容所跡）でもその思いを新たにしましたが、彼の思想は、数々の試練をくりぬけ、練り上げられてきたものです。そこには、彼自身の生き方の背景にある宗教的伝統も影響しているでしょう。それ自身が長い歴史の壮絶な試練をくりぬけた伝統なのです。また言うまでもなく、それは彼の医師としての経験や彼が学んだ様々な哲学的叡智が結晶化されたものでもあります。つまり、歴史が、あるいは世界が、フランクという唯一無二の存在を媒介にして、人類にとって重要な叡智を、20世紀という未曾有の激動の時代に顕在化させたのだ、と考えることができます。もちろん、フランクの考え方が唯一絶対であるとはいえませんが、人類には他にも人間の生き方についての叡智がいくつもあるでしょう。けれども、ロゴセラピーと実存分析が、20世紀という時代が結晶化させた貴重な実践的思想の実例・遺産の一つであることは間違いなくいえるのです。

そう考えることができるならば、重要なことは、まさにその叡智を我々一人ひとりが、それぞれの状況で誠実（annständig）に、そのつど新たに受け取り直すことにあるのではないのでしょうか。「ロゴセラピーは護られている」というルーカス先生の言葉が、私にとっても、とても印象的でした。歴史の荒波をくりぬけ鍛えられた叡智というのは、それだけで眼に見えないものから護られ、生き続けるのだということを深く信頼されているということが、じんわりと伝わってきました。そしてそのような信頼を基盤に、それぞれの状況で、誠実に受け取り直すことのできる人々が少数でも、確実な存在として続いていくことで、ロゴセラピーは護られてきたし、これからも護られていくのだ、と言われたように受け取りました。私自身も、そのことが意味のあることなのだ、自分も微力ながらその志を受け継ぎたいものだ、という思いを新たに今夏の旅でした。（T.O.記）